

の筋血流は全例 DE で SE より高値を示した。SDMM による筋血流反応の評価は、筋血流予備能の良い指標になると考えられた。また、運動に対する筋血流予備能を維持するためには、継続したトレーニングが重要であると考えられた。

17. 画像診断上、確定診断が困難であった原発性肝細胞癌の一例

隅屋 寿 瀬戸 幹人 油野 民雄
久田 欣一 (金大・核)
松井 修 (同・放)
山田 洋己 泉 良平 (同・二外)
寺畑信太郎 松原 藤継 (同・中検病理)

症例は59歳の男性で主訴は全身倦怠感のみである。飲酒、肝炎などの既往はない。偶然肝スキャンにて肝内の SOL を指摘され入院となった。体重減少はない。血沈の亢進はなく CRP (-), AFP (-), CEA (-), HBsAg (-) である。

肝スキャンでは右葉後区域に巨大な SOL を認め、RI アンジオのプール像では正常の肝よりもやや RI 集積が高い。肝胆道スキャンでは SOL 部位に RI の集積を認め、その排泄は遅延している。Ga スキャンでは SOL 部位に正常肝と同等の濃度の Ga の集積がみられる。X線 CT では全体に low density で著明に enhance される。血管造影では総肝動脈は拡張し腫瘍濃染像を認め隔壁、被膜を有している。いずれにおいても肝細胞癌が考えられるが Adenoma, FNH との鑑別は最後までできなかった。手術後の病理所見では Pseudoglandular type の Edmondson grade II 型の肝細胞癌であった。

画像診断の進歩には目覚ましいものがあるが、このように分化度の高い肝細胞癌では他の疾患との鑑別が難しく、画像診断における質的診断の困難性を感じる症例であった。

18. 肝 RI アンギオグラフィー蓄積像の検討 (第5報)

小林 眞 東 光太郎 大口 学
興村 哲郎 宮村 利雄 山本 達
(金大・放)

びまん性肝疾患の診断に肝 RI アンギオグラフィー蓄

積像が有用であることを報告してきたが、今回定量的検討を加え肝有効血流量の評価に有用であることが確認された。

症例は53例で ICG のみ施行例19例、ICG と BSP 施行例21例、BSP のみ施行例13例であった。方法は蓄積像における肝、肺に ROI を設定し1ピクセル当たりの肺/肝カウント比を算定した。さらに RI 静注後96秒～100秒間の加算像より同様に心/肝カウント比を算定した。

前者と ICG 15分値の比較では相関係数0.83 ($Y=33.70 \times -15.15$), BSP 45分値との間には有意な相関はなかった。後者と ICG 15分値の比較では相関係数0.76 ($Y=31.43 \times -7.30$), BSP 45分値との間には有意な相関はなかった。以上の結果より蓄積像は定量的検討においても ICG 15分値と良好な相関を示し肝有効血流量の有用な指標であることが認められた。ICG 15分値15%に相当する蓄積像肺/肝カウント比を前記回帰式より求め0.71を得た。以上の結果より蓄積像肺/肝カウント比による肝有効血流量の低下は0.71以上をもってすることが妥当と思われた。

19. 内視鏡的逆行性胆汁ドレナージ (ERBD) における核医学胆道スキャンの有用性

多田 明 立野 育郎 長東 秀一
(国立金沢病院・放)
米島 正廣 若林 時夫 (同・内)

従来は核医学胆道スキャンの適応として、黄疸の鑑別や急性胆嚢炎の診断における有用性が強調されていたが、わが国においては CT, US, ERCP, PTC などの画像診断が優先して施行されているのが現状であるように思われる。核医学の側からは救急医療への対応と新しい適応の拡大を考慮する必要がある。

悪性腫瘍による閉塞性黄疸に対する手術前の減黄疸処置としては、従来もっぱら経皮的胆管ドレナージ (PTCD) が用いられてきたが近年内視鏡を使用した非手術的胆道内瘻または外瘻形成術の試みがなされるようになりその好結果が報告されている。

昭和59年7月から当院内科で内視鏡的逆行性胆汁ドレナージ (ERBD) が行われるようになり、現在まで5例に13回の胆道スキャンが行われたので、症例を提示してその診断的かつ治療における有用性について報告した。